

[課程－2]

審査の結果の要旨

氏名 永縄 将太郎

本研究は、出産による骨盤臓器の位置の変化を評価するため、MRI を用いて出産回数と骨盤臓器の位置を評価し、また、肛門挙筋損傷と骨盤臓器位置の変化の関連についての解析を試みたものであり、下記の結果を得ている。

1. 出産のみによる影響を評価するために、未閉経女性に限定した解析を行った。1～3回の経膣分娩を経験した女性における直腸肛門移行部の位置は、回数を経るごとに尾側に偏位していた。一方で、膀胱や子宮の位置は、経膣分娩により変化していなかった。さらに、1～3回の経膣分娩を経験した女性における膣断面積は、回数を経るごとに増大していた。

2. 肛門挙筋の損傷は、帝王切開と比較して、経膣分娩による出産において、有意に高頻度で発生していた。肛門挙筋の損傷が存在している場合、直腸肛門移行部の位置が、尾側よりに偏位している事が示された。さらに、この直腸肛門移行部の位置の変化は、経膣分娩と帝王切開による出産を比較した場合にも認められた。膀胱と子宮の位置は、肛門挙筋の損傷の有無によって違いは認められなかった。加えて、膣壁損傷は、経膣分娩による出産した女性にのみ認められ、帝王切開により出産した場合には認められなかった。

以上、本論文は経膣分娩により直腸肛門移行部の位置が尾側に偏位することが明らかになり、その偏位は出産に伴って引き起こされた肛門挙筋損傷とも関連していることを明らかにした。本研究は、MRI 上での出産に関連した骨盤底部の変化の解明に重要な貢献をなすと考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。